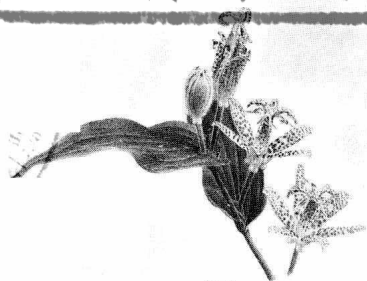


路

下卷

加賀乙彦

江苏工业学院图书馆
藏书章



新潮社



岐^き 路^ろ 下巻

印刷 1988年6月5日

発行 1988年6月10日

著者 ^{かがおとひこ}加賀乙彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808

電話(03)266-5111業務部／(03)266-5411編集部

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 1400円

© Otohiko Kaga 1988, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-330804-4 C0093

岐

路

下
卷

装画
野田弘志

午後一時十五分

雪のため外来患者はすくなく、時田病院では手持無沙汰な時が過ぎた。時田利平は暇を利用して床屋に行こうと、理容道具の一式を入れた信玄袋を提げ、トンビをまとい蛇の目をさして、玄関前に出た。看護婦たちが雪掻きをしている。車庫で車のボンネットをあけて覗きこんでいる浜田を見付け、声を掛けた。

「今晚は祝賀会じゃ。送り迎えに使わねばならんから、よう整備しとけ」

「それがですね、おお先生」と浜田は油で黒光りする顔をあげた。「この寒さでエンジンがさっぱり始動せんのです。さつきからクランクで何度も回してるんですが……。スパークプラグを今掃除したとこです」

「おれがアクセルを踏んどるから、お前、クランクをまわせ」

利平は運転台に登った。エンジンのスイッチを入れ、「ようし」と合図をしてアクセルを踏む。と同時に浜田が車の前でクランクを手回しした。エンジンは二、三回咳込むがすぐ凍った死体に

もどつてしまふ。十回ほど繰返すと浜田は汗まみれになり、クランクを投げ出して息をせわしくついた。

「だらしないやつじゃ。おれが回すから、お前がアクセルを踏め」

「おお先生には無理です」浜田はあわてて止めた。が、利平は、もうトンビを脱ぎ、クランク棒を手に車の前にかがみこんでいた。棒をエンジン軸に差込み、掛声もろとも回す。重い抵抗があつて、エンジンが緩慢に半回転した。しかし、それ以上はいくら気張つてもびくとも動かない。浜田はすくなくも毎度五、六回は回した。浜田ごときに負けてたまるかと全身の筋力を腕に集中させ、「えいやつ」と力むと背中では何か割けた。上着の背が破れたのだつた。利平は上着を脱ぎ、今度は艀を漕ぐ要領で、肩の力をゆるめ腹と腰に力を入れてやつてみる……動きた、一回、二回、三回目に人工呼吸による蘇生の手答えのようにエンジンが身震いして動き始めた。「動きました。動きました」と浜田が魂消た声を出した。

「あたりまえじゃ」利平は高笑いした。「腰じゃ、腰を使う。女と車は腰で自由にするもんじゃ。いいか、エンジンを冷さんよう動かしちよれ。なあにガソリンはいくら消費しても構わん。それより送迎のほうが大事じゃ」

浜田に別な上着を取つて来させて着ると、利平は外に出た。“津の国屋”の前に来て、利平は下関の地酒“関娘”を特別注文しておいたのを思い出した。親仁は綿入れで丸い肩で挨拶した。

「薦被こもかぶりを三つ、お届けしておきました」

「三つじゃ足りん。四つはいるぞ」

「御安心を。もう一つ、わたしどものお祝いとしてお届けしておきました」

「そんなら……いや、どうも有難う」利平は笑顔を振りまいた。さて、酒にびったり合う料理が必要だ。

今晚のもてなしは長州の郷土料理でいくと決めている。料理の目玉はむろん河豚だ。河豚刺、河豚ちり鍋、ウグイスの空揚げと変化を持たす。それに飛魚と鰯えその摺り身でつくる「摺り流し汁」。ペラを醤油酢で漬けた「ペラ酢漬け」も欠かせない。食卓の中心には浜焼の真鯛を置くが、これは大きければ大きいほどよろしい。あと寒鰯ぐりの照り焼、鮫鱈の肝の塩茹。生牡蠣をそえるか。いやいや牡蠣の癖のある味は河豚の淡泊な味を消すからやめておこう。旬の魚を思うと、それぞれの美味が舌先によみがえってきて、利平は唾をのみこんだ。

そうだ、魚屋に寄ってどんな魚が入ったか確かめておこうと利平は思い立った。染物屋、自転車屋、鰯屋、うなぎ屋、八百屋など小さな店が肩を寄せ合っている坂道で、青バスが車輪を雪に滑らしていた。タイヤが水車のように回るのに、ますます後退していく。まずいぞと利平は思った――坂の多い三田では雪道を車が滑る、主賓の松本少将と北里研究所の部長とはどうしてもうちの車で送迎したいが、何かよい方法がないか。電車通りから自転車まで下ってきた慶大生が転倒した。「まずいぞ」と利平は大声で言い、「魚文」の主人とばかり視線を合した。吹き曝しの店内には雪まみれの魚が並べられている。主人は深々と頭を下げた。

「この度はおめでとうございます。博士先生とは素晴らしいことで」

「浜焼は入っちゃるか」

「はいはい、二尺ものが二匹入っております」

利平は竹の皮笠を開き、苞つつもの中の鯛を見た。二尺は大袈裟で五十センチと四十センチぐらいだが、とにかく大きい。小さい鯛では鮮紅色の腹が、淡紫色となり、尾鰭が黒ずむ、年月を経た立派な大魚だ。

「これでよし」と言い、ほかに注文した魚を吟味した。寒鰯の大物が数匹、飛魚、鰯、鮫鱈と、うまい具合に入荷している。しかし、ペラはない。

「ペラはなかったか」

「残念ながら、けさの河岸には……」

「まあ、よい。大体揃うたな。お、河豚があるじゃないか」と丸っこい褐色の魚に目を止めた。

「はい、潮前河豚しよまへいぐくで江戸前でございます」

「これは食えんぞ。身にまで毒がある」

「でも、それで体が温まると召しあがる方がございます」

「いかん、いかん、味が違う。河豚は虎に限る」

「虎河豚は河岸に入りませんで……」

「いいんじや。下関から特別注文で入手してある」利平はひとしきり虎河豚の自慢をした。横なぐりの風が新雪を舞いあげ、店内は濃霧の中のように白に染まった。主人は硝子戸をすこし閉めた。

「えらい雪でございますな。積りそうです」

「なあに、もうすぐ三月じゃ。春の雪はすぐ融ける。冬を消毒しちやるだけじゃ」

魚屋を出ると、利平は隣の「子育て地藏」に合掌した。地元の人々があまりに厚く崇敬し、四の日の縁日も盛大なので、利平は天邪鬼をおこし、「シヨンベン地藏」などと言って莫迦にするのだが、あたりに誰もいない時は、日頃の無礼をわびる気もおこって手を合せるのだった。神仏つまり人の力の及ばない至高の存在には素直に頭をさげる気持が彼には強かった。耶穌だとして例外ではない。聖心女子学院の校医をしている関係で、教会の礼拝を目にする機会も多く、そんな場合、素直に頭を垂れて敬意を表するのだった。そして、この至高の存在のなかには天皇陛下も入っていた。彼の知識では上御一人はまぎれもなく人間ではあるけれども、天皇という神聖な位につくや、神の化身としての神通力をそなえるのだ。たとえば、陸海軍の最高の長としての大元

帥陛下は、一軍人であつた利平に靈妙な力を及ぼした。彼は日本海大海戰勝記念の觀艦式で仰ぎ見た明治天皇の御雄姿を忘れない。ともかく、それが彼がたった一回見た大帝の御姿であり、そのとき、このまま自分が死んでいいと思うほどの感激を覚えたのだつた。

店内に客はおらず、赤ら顔の親方は煉炭火鉢を囲み、新聞を読んでいた。利平を見ると揉み手して迎えた。

「おや先生、呼んで下さればいつでもうかがいましたのに」

「人を呼びにやるよりは自分で来たほうがはやいと思つてな。ま、いつものようにやつてくれ」

二十年来利平の髪を刈つてきた老親方は何もかも心得ていた。利平が信玄袋を開いて理容道具一式を並べると、まずアルコール綿で椅子を消毒し、利平を坐らせ、彼の持参したエプロンで覆つた。バリカンも鋏も櫛も、すべて利平は完全消毒済みのを用意していて、けつして店の物を使わせない。大体店に来るのはまれで、月に二回院内に出張させるのを常としていた。店に来るのは何か急の行事があるときなので床屋は尋ねた。

「きようは何かのお式で」

「おれは博士になつてな、その祝賀会をやる」親方の読んでいたのは読売新聞で残念ながら時事新報ではなかつた。

「それは、それは……」親方は頭をさげて仕事を始めた。バリカンで刈り上げていく。余計な口はきかない。しかし利平が話し掛ければ応答は普通にする。ここらあたり、利平の氣性をよくのみこんでいる。

利平は親方の數にまみれた顔と自分の顔とを見較べた。床屋のほうが自分より十以上は上だろ。七十二か三か、老人斑の濃く染みた頬やまばらな白髪は自分の十年後を予想させた。黒いと自負する自分の髪にも大分霜が立っている。そして目の下の皮膚の余剰はまぎれもなく老年の相

だ。

時々、市電がのろのろと通るほかは車も人も跡絶えていた。風の小止みに雪は音もなく紐を垂れ、煉炭火鉢の薬罐が煮たつ音のみする。髪洗いがすみ、剃刀が当てられたところから、利平は睡くなってきた。

彼は七十三歳で、白鬚をのばし、博士と金文字の光る大勲章を胸にぶらさげている。やせたため大礼服がぶかぶかで、大勲章が無様に垂れさがるのを気にしながら歩いている。と、誰かが嗤った。見ると床屋の親方だ。「博士なんか何の意味もありませんよ」と嗤っている。「生意気な」と怒鳴りつけると、立派な白鬚をひっぱり、「切りますよ」とおどす。そこで目が覚めた。鏡の中の自分に変化を認めず、利平は安心した。

「おお先生」と呼んだのは浜田である。「往診の依頼が来ています」

「副院長に行ってもらえ」

「それが、品川の永山さまなので」

「永山の父上がどうかしたのか」

「はい。風呂場でお倒れになったそうです」

「そいつはいかん」利平は急に立ちあがった。あわてて剃刀をあげた親方が飛びのいた。

「ああ、びっくりした、先生、お怪我はなかったですか」

「大丈夫じゃ。すぐ出掛けにやならん」

「もうすこしで終りですが」

「待っておれん。すぐ往診に行かにやならん」

利平は石鹸を拭いたり、櫛で髪だけを整えさせると、浜田を従えて外に出た。永山の父上とは永山光蔵で、菊江の父である。妻を失ってから伊皿子坂の大邸宅を処分して東品川の御台場を

見晴す海岸の家に引籠った。永年のあいだ鉦山技師として山歩きたあいだに蒐集した鉦石の標本を整理するのを唯一の楽しみとして、孤独な晩年をおくっていた。時々、菊江や藤江の来訪を許すほかは、誰にも会わず、もちろん外出して人に会うこともなかった。しかし傘寿を越えても矍鑠としていて、病い知らずの老人だった。それが突然倒れたという。

「電話があつたのか」

「いいえ、電話はお持ちになりませんので」

「そうじゃった」

「爺やさんが雪の中を歩いて知らせに来ました」

「車で行こう。エンジンは温めてあるだろうな」

「それが……」浜田はしよげ返った。「エンジンは動くので試しに外に出てみましたところ、どうしても滑って坂を登れません。雪用のチェーンがあればと代理店に電話しましたが、あつた分はもう出払ってしまったといひます」

「そいつは困つたぞ」利平は坂の中途に乗り捨てられた青バスや自動車に雪に埋れているのを横目に溜息をついた。せつかく一世一代の学位取得祝賀会なのに、この雪、そして岳父の急病と悪いことが重なる。困つた、困つた……。

午後三時半

時田利平は、「ありや何じゃ」と言つた。間島婦長は、「お巡りさんではありませんね。兵隊さんみたいですね」と言つた。時田利平は、「陸戦隊じゃ。戦時の重装備で行きよる」と言つた。

電車通りを小型トラックに乗った陸戦隊が行く。つぎつぎに行く。大変な数である。小銃、機関銃が白脚絆の足元に積みあげられ、黒々と光っている。帽子に雪が積っていないのは、今上陸したばかりだからだ。芝浦に緊急上陸した大部隊、これはただごとではない。やつとトラックの

列が通り過ぎた。二人は坂道を病院の方へ下り始めた。

「あした、また診てやらにゃいかな」「はい。でも大したことがなくてようございました」「血圧が高すぎる。よう今まで医者にかからんで平気でおったな。糖尿もあるとにらんだ。尿は大丈夫か」「はい、ここにちゃんと持ってます」「転んで瓶を割らんように気をつけろ」

そう言つたとたん、転んだのは利平だった。長靴が横滑りし、腰を舗石に打った。汗が吹き出るほどの痛みを我慢し、助けられてどうにか起きあがった。

「大丈夫でございますか」「なあにビクともせん。骨折もなし。筋肉挫傷もなし。毎日カルシウムを〇・六グラム服用しとるからな。老人は骨粗鬆症になりやすいからカルシウムを補給せんといかん。お前も服用せい」「まだそんな年ではございません」「もし糖尿があるとすると遺伝じゃない」そのとき病院の門を見て間島婦長は眉をひそめた。

正月に発作をおこしてから菊江の病状は思わしくない。喘息は小康状態だが糖尿病が進み、そのため冠狀動脈硬化がおこつて心臓が衰弱している。本人は喘息の発作さえおきなれば平気だと、床をたたんで事務などについて、何かの拍子に心臓機能に障碍でもおきはせぬかと、利平は内心ひやひやだが、そんな危惧を面てにだせば、かえつて本人の健康に悪いだろうと、見て見ぬ振りをしている。

居間にもどると菊江がソファに坐つていた。

「どうも有難うございます」と頭を深々と下げた。

「何がじゃ」利平は妻を睨みつけた。

「こんな大雪の中を父を往診していただきまして有難うございます。で……」

「回りくどいな。父上は大したことはない。高血圧のメマイで風呂場で倒れ、頭を打たれた。脳震盪じゃ。しかし、あの高齢じゃから後遺症が心配で、用心のために入院をお勧めしたが、どう

しても嫌だ、死ぬなら海に見えるこの家がいいとおっしゃる。お前に似て頑固な爺様じゃ」

「後遺症がおきるでしょうか」

「分らん。血圧が高いから、ちよつとした脳血管の損傷でも大事になる可能性があるということだ。今のところ神経麻痺も意識障碍もないから、大丈夫だとは思うが……。当面血圧をさげるのに全力をつくす」

「やっぱり入院させたほうがいいと思います」

「それはそうだ。慶応病院なら磐石じゃが」

「わたし、やっぱり行つて、父を説得します」

「いかん、いかん。海沿いはすごい吹雪になつちよる。電車は停つとるし、車は通わん。お前の体じゃ無理じゃ。おれでさえ、やつと辿りついた」

「じゃ藤江に行つてもらいます。電話したらひどく気をもんでいるんです。あ、そうそう。霞ヶ関あたりでけさ早くに変事がおきたらしいんです。総理大臣と大蔵大臣と内大臣とあと何人かが陸軍部隊に殺されたというんです」

「まさか……デマじゃろう」

「いいえ、風間の情報ですもの、確実ですわ。何でも、けさ、明け方に脇の敬助さんから振一郎さんに電話があつたんですって。それが、あなた、驚くじゃありませんか、出撃した部隊というのが敬助さんの聯隊なんですって」

「敬助も出撃したのか」

「しなかつたそうです。振一郎さんがその後調べたところ、出撃したのは第三聯隊の三分の一と、あと第一聯隊ですって」

「両方とも麻布の聯隊だな。陸軍の精鋭と言われている部隊じゃ。そいつが何てザマだ。要する

に陸軍は腐つちよる」

海軍は絶対そういう残酷な謀叛に荷担はせん。それで分った、さっきの陸戦隊は陸軍鎮圧に出動したのだ。海軍よ頑張れ。大臣が暗殺されたとは大変な事件であるけれども、もともと大臣になるほどの人はそういう危険を予想すべきで、殺されたからといって驚くこともない。利平は、大事件と聞いて、かえって元氣になった。学位取得祝賀会の当日、歴史的事件がおきた。時田利平一世一代の祝日と歴史とが重なった。幸先がすこぶるよろしい。

「津の国屋」が届けてきよったか」

「はい」

「魚文」も来たか」

「はい、来ております」

「さて、河豚の身の締り具合を見ておく」今日の料理は、医学博士時田利平みずからが作るのだ。急いで立った菊江を手で制した。「お前は、今日は見物じゃ。体を大事にせんといかん」

「実は」菊江は言いにくそうに言った。「風間の振一郎さんが、大事件突発でいつ政変があるかも知れないので今晚は御遠慮したいと……」

「そんな莫迦な」利平は癪癪玉を破裂させた。「高が一代議士じゃないか。まだ大臣になる器でもあるまいに、政変なんか関係ない」

「そうおっしゃっても、振一郎さんは政友会切つての陸軍通で、今度は自分の力量を示す好機なんじゃありませんか」

「二月二十六日なら都合がいいと風間が言ったから今日にしたのだ。それを今になって遠慮したい」とは何事だ」

「でも場合が場合ですから」

「大事件だろうが政変だろうが祝賀会とは関係ない。よし、おれが風間に電話する」

「およしあそばせ」菊江は止めた。「わたしがもう一度藤江に頼んでみます」

「頼まれて来るようなやつに来てほしくはないわ。大体風間は頭が高い。代議士になりよったら博士なんか屁とも思わん」

「まさか……」菊江は子供をあやすように言った。「大丈夫、わたしが来るようにさせますから、安心してお料理にかかって下さいな」

「まあ、風間なんか来んでもいいが……」利平は口髭をしごきつつ、気持を鎮めた。実は、義弟の風間振一郎代議士も出席するからと、今日の招待客たちに吹聴してある。とくに山口出身の力士、大鏡を引っぱりだすとき、大の相撲好きで、横綱免許をあたえる吉田司家と親しい振一郎の名前を使った。彼が出席しないと、おのれの面目が丸潰れになるのだ。

ノックがあつて間島婦長が入ってきた。

「糖が出てます」

「やっぱりそうか」利平はうなつた。永山光蔵は糖尿病であつた。その末期に来る高血圧と動脈硬化がメマイの原因であつた。とすると厄介な病状だ。

「父ですか」と菊江が尋ねた。

「そう、糖尿病、お前と同じやつじゃ」

利平は背広を印半天に着替えた。この姿で炊事場で陣頭指揮をとり、客を迎えるつもりだ。夏江と史郎を手伝わせ、一家で客をもてなすのだ。

「夏江はおるか」

「外出してます。夕方には戻ると言っていました」

「何だ」利平は不満だ。「史郎は」

「事件の様子を見てくると霞ヶ関に出掛けました」

「オッチョコチョイなやつだ。危険きわまる」

「わたしも止めたんですが、世紀の大事件だからと……」

「何が世紀の大事件じゃ」不機嫌がまた腹の底に溜つてきた。夏江にも史郎にも魚料理を教えるから炊事を手伝えと言つておいたのだ。史郎はこの一月十日に除隊となり、家でぶらぶらしていた。毎日器械体操ばかりしていると暇が見ると暇がたっぷりあるはずではないか。

午後八時半前

時田利平は苛立っていた。招待客がさっぱり現れないのだ。定刻の五時に来ていたのは唐山博士と北里研究所の部長だけ、つまり近所に住む人だけであつた。雪のため省線・バス・市電が方々で停り、タクシーはつかまらずという状況では、ただ待つより仕方がなかった。七時すぎになつて前頭三枚目の大鏡が、さすが抜きん出た巨体を羽織袴に包んで来てくれた。利平は大喜びで、長州弁まるだしで応待した。が、大鏡に紹介したい風間振一郎が一向にやつて来ない。長州弁での話題も尽きて、困惑しているところに、巡洋艦八雲の元艦長松本少将が軍服姿で到着した。この人の下で利平は日本海大海戦を戦つたのだ。昔話に花を咲かせたまでではないが、媒酌人になつてもらう以上、小林と夏江を引き合せたいのに、夏江が帰つてこない。菊江を問いつめると、夏江の外出先は帝大セツルメントと分り、禁止していた赤の巢窟に娘がまだ出入りしていたのかと驚きもし、えりにえつてこの大事な折にそんな所へと立腹し、客の手前、立腹も笑顔に変えて苦しい思いだった。

もうかれこれ八時半になる。唐山博士と部長を三時間の余も待たせている。もう始めよう。利平は、客たちの前に進み出た。

「まだおいでにならない方が多いのですが、時間が過ぎますので始めます。今から河豚の刺身を